

## ◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第30回/朝香宮邸—宮家ご家族とその暮らし(後編)

### Residence of Prince Asaka 1933—

女主人である允子妃殿下のぶこが薨去されたのち、朝香宮家のご家族団欒の機会は極めて少なくなりました。第1王子ごうきよ孚彦王は歩兵第1連隊に所属し、ついで千葉に家を借りて歩兵学校に勤務、第2王子正彦王も海軍兵学校卒業後、艦隊勤務となり、白金台の邸宅には時々しか戻られませんでした。やがて二人の王子はご結婚し独立されました。鳩彦殿下とお二人の暮らしとなったきよこ漑子女王のご生活は、女子学習院本科ご卒業後、ピアノ、フランス語、油絵、活け花、茶の湯のほか、編物・洋裁・料理に習字・和歌など、1週間を通してお稽古事があり、お休みは土日のみでした。お稽古事は接客部分であった「1階喫煙室」を使用されていました\*1。陸軍中將及び近衛師団長の鳩彦殿下は師団の運転手付きの車で朝出勤し、夕方帰るとい



図1.1階喫煙室(昭和8年竣工時)昭和58年開館に際し全面改修し、現在は展示室として使用。

図2.近衛師団の車に乗られる鳩彦殿下(写真提供:栃木県在住駒場氏)

図3.ご結婚式の朝、小桂長持(こうぎながばかま)姿の漑子女王(朝香宮邸正面玄関前、昭和16年11月7日)

\*宮家の暮らしについては、「朝香宮邸のオール・デコ」(1986年 財団法人東京都文化振興会)、「旧朝香宮邸をたずねて」(2001年 社団法人霞会館)及び朝香宮関係者からの聞き取りを参考とした。なお文中、使用人の名称等は関係者の記述のままとした。



図3

ご生活でした。軍人らしく規則正しい生活図1をされ、お食事なども1分違わず時間どおりされていたということです。

宮家ご家族は歩いて正門を出ることはなく、外出の際は正式のお出かけ、普通のお出かけ、そして別荘行き・通学用と、目的によって数台の車が

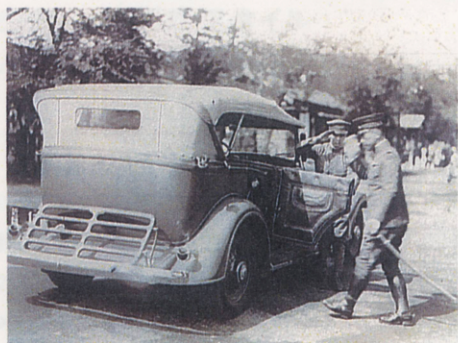


図2

使い分けられていました。宮家には「表」の仕事をする事務官1名、属官4.5名、「奥」の仕事をする侍女たち、他運転手2名、雑用係2名、小使い2名など、庭仕事をする人まで含めると総勢30数名

が働いていました。宮内省事務官をはじめ宮家で働く男性たちはすべて正門横の官舎から毎朝出勤していました。本館の裏手には日本館があり、老女以下侍女たちが10名前後、次侍女、下女ら数名が住み込みで働いていました。漑子女王も宮家に仕える人々と接する事により、お若いながらも世渡りの術を身に付けられていったということです。昭和16年にはその末娘の漑子女王もご降嫁されました。

戦後、昭和22年朝香宮家は他の10宮家の方々とともに皇籍離脱し「朝香家」となりました。古くから宮家に仕えていた人々は宮家がなくなることを残念がりましたが、鳩彦殿下はこう云われたそうです。「富美宮ふみのみやのためにできた宮家は私一代で終わってよいのだ。\*2

両殿下の思いが込められた建物が朝香宮邸として刻んだ年月は14年間でした。庭園美術館は今年、開館25周年を迎えます。美術館としての歴史が一番長くなりました\*3。(高波)

\*1.当時の「喫煙室」は接客スペースのひとつで、招待客の特に男性たちが会食のあとに集まり、葉巻やタバコを煙(くゆ)らせながら会話を楽しむ部屋という役割を持っていた。

\*2.「富美宮」は明治天皇内親王である允子妃殿下のご幼少時の御称号。ご結婚後も殿下や他宮家の方々から御称号で呼ばれていた。

\*3.朝香宮邸(昭和8年-22年)、外相・首相公邸(昭和22年-29年)、迎賓館(昭和30年-49年)、白金プリンス迎賓館(昭和49-56年)